心の栄養剤No.223『子どもの心が育つとき』

子どもの成績が悪い時、どういう言葉を掛けていますか？

私も教師時代、悩みました。答案用紙を渡す時、「何と言えばいいかな」と考えました。

そして決めました。

「間違ったところを繰り返しやろう。いいところはいっぱいあるんだからと言おう」と。

テストというのは大事なところを問題に出します。だからそこを繰り返してやれば、だんだん力はつくのです。

でも、子どもは間違ったところを繰り返しやるのを嫌います。できそうな問題ばかりやるから伸びないんです。

だから、間違えたところを繰り返しやれるように、子どもをやる気にさせる言葉を言わないといけないのです。

家庭でもそうです。毎回悪い点数を持って帰ってきた子にどう声を掛けるか。どう言えば、子どもが希望を持って頑張り、愛情を感じるか。

これは難しいです。「頑張れ、頑張れ」では、子どもは何をどう頑張ればいいか分かりません。

勉強以外のいいところを見てあげましょう。

「お前はこの頃ご飯をいっぱい食べるようになった。洗濯物も取り込んでくれるし、お手伝いができるいい子になったね」と。

褒められて、「はい」と言える子は少しずつ伸びてきます。大人が賢くならないといけないのです。

子どもにぜひしてあげてほしいのが読み聞かせです。そうすると素晴らしい感性が育ちます。

『マヤの一生』という物語があります。戦時中の物語です。

「マヤ」という犬を3人の兄弟が大事に育てていました。

ところが、戦争が激しくなって、「この食糧難の時に犬を飼うのは贅沢だ」と言われ、公園に集めて殺すことになりました。

マヤは大事な家族の一員でしたので、兄弟は、「僕たちがご飯を減らします。だからうちの犬は許してください」と言いました。

けれどダメでした。次郎と三郎がマヤを公園に連れていき、「マヤ、またいつか会おうな。しばらくのお別れだよ」と言いました。

太い丸太を持った男の人が近づいて来ました。そしてマヤをパーンと殴りました。

マヤは「ギャーッ」と鳴いて、首の綱を切って逃げました。

ショックを受けたのは子どもたちです。その晩、二人は高熱を出し寝込みました。

夜中、うなされた次郎が言いました。「マヤが来てる」

「そんなはずはない。マヤは丸太で殴られ血だらけになった。今頃どこかで倒れているに違いない」と親は言いました。

でも次郎はずっと、「マヤが来た」と言い張るのです。

あんまり言うので台所に行ってみると、血だらけになったマヤがいました。

マヤは、一番かわいがってくれた次郎の膝の上に頭を乗せ、そのまま息を引き取ってしまうのでした。そういう物語です。

私は授業でこの本を読んだ後、「もしマヤが言葉をしゃべれたら、何と言っただろうね？」と子どもたちに聞きました。

小学１、２年生は「やっと帰ってきたよ」とか言います。

５、６年生になると、「何であんなところにボクを連れていったんだ」とか「長い間大事にしてくれてありがとう」とか言います。

中学生、高校生になると、「たとえ動物でも家族と一緒に暮らした命だ。その命を奪う戦争はよくない」などの感想も出てきます。

絵本を読んで感想を言い合うことで、子どもの心は少しずつ成長していくんですね。

教育評論家　坂本　光男

私の中では、「ゴールデンウィーク＝子どもの日」というイメージが強くあります！！

今年の「子どもの日」には子どもの心をすくすく育てる為に、子どもさんの「いいところ」をしっかり誉めてあげながら「読み・聞かせ」も実行してみませんか！？

「誉める」とは「光の言」と書くように誉めてあげる事によって、きっと子どもさんは最高に輝く笑顔を見せてくれるはずです！！

PS：私自身、子ども達に「読み聞かせ」をやった記憶はないのですが、実は現在、この「心の栄養剤」を書いた後、毎月必ず家族相手に「読み聞かせ」をやってま～す！！

くすりのキュート　倉光　浩城

※ご相談がございましたら、いつでもお電話くださいませ☺️

TEL（090-8357-2904）